健康寿命延伸教室
自己点検・評価報告書

令和５年４月

岡山学院大学人間生活学部

健康寿命延伸教室の評価項目

健康寿命延伸教室の教育課程に関する事項

1. 健康寿命延伸教室の教育課程について

1-1 健康寿命延伸教室の目的を明確に示している。

1-2 健康寿命延伸教室の目的に沿った教育内容を明確に示している。

1-3 健康寿命延伸教室の教育課程の内容を随時点検している。

健康寿命延伸教室の学生支援に関する事項

2. 健康寿命延伸教室の学生支援について

2-1 健康寿命延伸教室の目的を達成するための教育資源を有効に活用している。

産業界等社会からの視点を含めた、プログラム内容・手法に関する事項

3. 産業界等社会からの視点を含めた、プログラム内容・手法について

3-1 ステークホルダーに対して外部評価を行っている。

この自己点検・評価報告書は令和４年４月から令和５年３月までの数理・データサイエンス・AI 教育プログラムの自己点検・評価活動の結果を記したものである。

令和５年４月

理事長
原田　博史
学長
原田　博史

1 健康寿命延伸教室の教育課程について

1-1　健康寿命延伸教室の目的を明確に示している。

健康寿命延伸教室の目的を明確に示している。本学ホームページの健康寿命延伸教室のページで下記のとおり明示している。

本学では過去13年間にわたり岡山県下で最大の会員を抱える倉敷市老人クラブ連合会と連携して、学内での栄養指導と健康に配慮した食事の提供を学生主動で運営する授業科目アクティブラーニング（健康寿命延伸教室）を継続して実施しています。健康の保持増進、疾病の一次、二次、三次予防のための栄養指導を行う能力を獲得するために、地域住民の方々との交流経験を積むことにより管理栄養士に必要な対人指導能力の向上を図る取り組みです。

1-2　健康寿命延伸教室の目的に沿った講義概要及びシラバスを明確に示している。

健康寿命延伸教室の目的に沿った講義概要及びシラバスを明確に示している。

アクティブラーニングⅠ・Ⅱの講義概要は学生便覧の中に下記の通り明示している。

アクティブラーニングⅠ（健康寿命延伸教室Ⅰ） 学生が将来への目的意識を明確に持てるよう、職業観を涵養（かんよう）し、職業に関する知識・技能を身に付けさせ、自己の個性を理解した上で主体的に業務を遂行できる能力・態度を育成する。具体的には本学の主催する地域住民を対象とした健康寿命延伸教室で、身体計測および食事調査（SAT）をチームで担当し、高齢者とのおよびチーム内でのコミュニケーション能力、数理・データサイエンス・AI教育プログラム獲得につながるデータ収集能力、理論的思考能力を養う。 アクティブラーニングⅡ（健康寿命延伸教室Ⅱ） 学生が将来への目的意識を明確に持てるよう、職業観を涵養（かんよう）し、職業に関する知識・技能を身に付けさせ、自己の個性を理解した上で主体的に業務を遂行できる能力・態度を育成する教育（キャリア教育）を行う。具体的には本学の主催する地域住民を対象とした健康寿命延伸教室で行う栄養ケアマネジメントおよび食事提供の実践を通して、対人およびチーム内でのコミュニケーション能力、および総合的な栄養ケアマネジメント能力を涵養する。

また、アクティブラーニングⅠ・Ⅱのシラバスは下記の通り本学ホームページで公開している。

令　和　4　年　度　教　育　計　画							
科目名	アクティブラーニングⅠ	授業回数	15	単位数	2	担当教員	竹原　良記 高槻　悦子 内田　雅子
質問受付の方法（e-mail,OH等）：e-mail：takehara @owc.ac.jp、授業後に受け付ける							

<table>
<tr><td>教育目標と学生の学習成果</td><td colspan="2">教育目標：本授業は、実務経験のある教員等による授業科目である
学生が将来への目的意識を明確に持てるよう、職業観を涵養（かんよう）し、職業に関する知識・技能を身に付けさせ、自己の個性を理解した上で主体的に業務を遂行できる能力・態度を育成する。具体的には本学の主催する地域在住の高齢者を対象とした健康寿命延伸教室で、身体計測および食事調査（SAT）をチームで担当し、高齢者とのおよびチーム内でのコミュニケーション能力、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム獲得につながるデータ収集能力、理論的思考能力を養う。

学生の学習成果：本演習では、2 年生を対象とし、栄養ケアマネジメントの演習活動「健康寿命延伸教室」に参加することにより、次の汎用的学習成果獲得を目指す。身体計測および食事調査（SAT）をチームで担当し、地域住民とのおよびチーム内でのコミュニケーション能力、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム獲得につながるデータ収集能力、理論的思考能力を養う。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">教育方法</td><td>授業の進め方</td><td>（講義・演習・実験・実習・実技）
１．開始から 5 回目までの授業は全員出席して測定機器の練習を行う。
２．「健康寿命延伸教室」は、今年度中に４回予定されるので、学生は４回のいずれかの２回に参加する。参加する回ごとに、参加前日の授業で会場準備をして身体計測または SAT の予行演習を行い、参加当日は作業を行って、終わりに互いに参加した会のフィードバックを行い、内容を次回担当に渡す。
３．この演習を通して、対象者とのコミュニケーションができ、身体計測機器および SAT の機器を一通り操作できるようにする。
４．最後の授業において総合討論を行い、レポートにまとめる。これは次年度の活動の参考資料となる。</td></tr>
<tr><td>予習・復習</td><td>１．予習として「健康寿命延伸教室」において事前に習得すべき内容を理解し、授業に出席すること。予習時間 90 分。
２．復習として毎回、「健康寿命延伸教室」または自己について課題を発見し、考察した成果をまとめて、最後の授業においてレポート作成の資料とすること。復習時間 90 分。</td></tr>
<tr><td>テキスト</td><td>「健康寿命延伸教室」の内容を記載した冊子を配布する。</td></tr>
<tr><td>学習評価の方法</td><td colspan="2">「健康寿命延伸教室」の事前準備時および参加活動時において以下の①～④の観点から 4 段階の積み上げ式（ルーブリック）で、管理栄養士を目指した対人コミュニケーション能力・栄養マネジメント（身体計測・SAT）を、評価する（1 回あたり４点満点×３つの観点）。
身体計測・SAT の観点：
①測定技術を身につける、②会話能力を身につける、③チーム力を身につける。
各教員は、最初の測定機器の練習、参加毎の評価、および最後のレポート評価を合計し、100 点法にて評価する。最終的に全教員の評価を平均する。</td></tr>
</table>

注意事項	・ 開催される「健康寿命延伸教室」ごとに授業を開講しているが、学生が受講しなければならない授業の開講時期は、参加する時期により異なる。予め自分の担当時期を周知して授業に参加すること。 ・ 授業に欠席をする場合は、必ず事前に担当教員に知らせておくこと。

令　和　4　年　度　教　育　計　画							
科目名	アクティブラーニングⅡ	授業回数	15	単位数	2	担当教員	平野　聡 佐藤　幸枝
質問受付の方法（e-mail,オフィスアワー等）：A 棟 206 研究室　水曜日 13 時から 14 時 30 分 hirano@owc.ac.jp							

教育目標と学生の学習成果		＜教育目標＞本授業は、実務経験のある教員等による授業科目である 学生が将来への目的意識を明確に持てるよう、職業観を涵養（かんよう）し、職業に関する知識・技能を身に付けさせ、自己の個性を理解した上で主体的に業務を遂行できる能力・態度を育成する教育（キャリア教育）を行う。具体的には本学の主催する地域住民を対象とした健康寿命延伸教室で行う栄養ケアマネジメントおよび食事提供の実践を通して、対人およびチーム内でのコミュニケーション能力、および総合的な栄養ケアマネジメント能力を涵養する。 ＜学生の学習成果＞ 栄養ケアマネジメントの演習活動『健康寿命延伸教室等』を担当することにより、大学で修得した学生の学習成果を認識し、管理栄養士として対象者およびチーム内で充分にコミュニケーションがとれ、栄養ケアマネジメント業務や給食管理業務をスムーズに運営することができる。このことにより卒業後のキャリアで自信をもって栄養管理能力が発揮できる。
教育方法	授業の進め方	（講義・演習・実験・実習・実技） 1.『健康寿命延伸教室等』は、健康寿命延伸教室および地域訪問健康寿命延伸教室より成り、3 年生後期から 4 年生前期終了まで 4 回開催される。この中で、学生は健康寿命延伸教室の「対象者とのコミュニケーションおよび栄養マネジメント」を 1 回、同じく「対象者とのコミュニケーションおよび食事提供」を 1 回および地域訪問健康寿命延伸教室の「対象者とのコミュニケーションおよび栄養マネジメント」を 1 回、参加担当する。 2.『健康寿命延伸教室等』の当日の参加に関しては、事前に配布される役割分担表に沿って参加する。なお、学習のフィードバックは、各演習終了時に解説を行う。
	予習・復習	【予習】90 分：事前に習得すべき内容を理解し、授業に出席する。 【復習】90 分：健康寿命延伸教室等または自己についての課題を発見し、考察した成果をまとめて、健康寿命延伸教室等毎に行う反省会で報告する。
	テキスト	健康寿命延伸教室等の内容を記載した冊子・講義資料（2 年生前期に配布済み）を用いる。

学習評価の方法	１．健康寿命延伸教室等の参加を行うまでに小テストを実施する。合格に至らなかった者は補習への参加をおこなう。 ２．「健康寿命延伸教室等」に向けた事前準備および授業時に、4 段階の積み上げ式(ルーブリック)で、評価をおこなう。(4点満点×4つの観点)。最終的に各担当での評価点を合計し、100 点法にて評価する。 ◎健康寿命延伸教室等の「対象者とのコミュニケーションおよび栄養マネジメント」の観点 汎用的学習成果：①対象者への会話能力、②業務遂行能力 専門的学習成果：③栄養ケアマネジメント能力、④総合的マネジメント能力。 ◎健康寿命延伸教室の「対象者とのコミュニケーションおよび食事提供」の観点 汎用的学習成果：①対象者へのコミュニケーション能力、②チームでのコミュニケーション能力。 専門的学習成果：③対象者への総合的マネジメント能力、④チームとしての総合的マネジメント能力。
注意事項	・地域高齢者と合同での演習であるため、出席を重要視する。 ・授業に欠席する場合は、必ず事前に担当教員に連絡する。

1-3 健康寿命延伸教室の教育課程の内容を随時点検している。

健康寿命延伸教室の教育課程の内容を随時点検している。令和 4 年度 FD・SD ワークショップで点検した結果を下記の通り報告し情報共有を図った。

アクティブランニング（健康寿命延伸教室）・栄養長寿教室等の活動の取り組み方と見直しについて
～2 年生の学習到達度評価についての検討～

はじめに

健康寿命延伸教室は、以前は栄養長寿教室または地域訪問栄養長寿教室という名称で、倉敷地区老人クラブ連合会会員様を対象に、高齢者の健康増進を目的として平成 19 年度より継続して開催されていた。令和 2 年度では、コロナ（COVID-19）禍により対象を本学学生や大学・短大教員で行った。令和 3 年度には名称を健康寿命延伸教室（以下、健康改善教室（仮称））に改め、倉敷地区の高齢者のみならず健康無関心な若年層も含めた地域住民の健康づくりの推進を目指して実施されることとなった。令和 4 年度は、未だにコロナ禍は継続しているが、4 回の健康増進教室のうち 2 回分は再び倉敷地区老人クラブ連合会会員様をお招きして実施することができるようになった。

本学学生は、この健康増進教室で管理栄養士役になって栄養ケアマネジメント活動を疑似体験する。2 年生は授業科目「アクティブラーニングⅠ」で、身体計測をとおして外部の地域住民とふれあい、栄養マネジメントが行える管理栄養士になるための第一歩と位置付けた。そして 3 年生および 4 年生は授業科目「アクティブラーニングⅡ」で、栄養アセスメントと栄養指導を行い、さらに、今年度は高齢者対象ではあるが食事提供（献立作成、食事指導）を実践するなど、総合的な栄養マネジメントを実践した。

令和 3 年度 FD・SD ワークショップでは、2 年生に対して能動的に授業参加を促すための方法として、2 年生のルーブリック自己評価の結果から、対象者ライフステージに関わりなく、学生に分かりやすい表現で積上げ式ルーブリック評価レベルを設定すべきだと考え、新たに改良したルーブリックを提案した。今年度はそれを使って授業を行い、2 年生のルーブリック達成度を検討した。また、対象となる

ライフステージも広げたことに対しての問題点ついても検討した。

（１）　今年度の健康増進教室実施状況（表 1）

令和 4 年度は、2 年生は前期・後期の通年で「アクティブラーニングⅠ」を履修した。4 年生は、令和 3 年度後期より令和 4 年度前期まで「社会との接続Ⅱ」を引き続き履修し、3 年生は、令和 4 年度後期より令和 5 年度前期まで、「社会との接続Ⅱ」から改名されたカリキュラム名「アクティブラーニングⅡ」を通年で履修する。令和 4 年度の健康増進教室等活動は、表 1 に示すとおり実施した。名称は、給食提供を行っている回には栄養長寿教室の継続の回数を付け、給食提供を行っていない回には地域訪問栄養長寿教室の継続の回数および地域という言葉を付けた。

表 1　令和 4 年度　健康増進教室実施状況

	令和 4 年度前期		令和 4 年度後期	
	5 月 28 日	7 月 9 日	10 月 22 日	11 月 26 日
名　称	第 51 回	第 19 回地域	第 52 回	第 20 回地域
対象者	高齢者（14）	食栄 4 年生（15）	高齢者（9）	短大生（7）
H31 年度入学生	◎	○（7+8）		
R2 年度入学生			◎(8+8)	○
R3 年度入学生	◇(12)	◇(13)	◇(11)	◇(12)

◎：栄養指導および給食提供　　○栄養指導　　◇身体計測および SAT

（２）　授業の実施要領

・2 年生「アクティブラーニングⅠ」

授業は、オリエンテーションの後、学生は第 1～4 回目の授業で、全ての測定装置の使用方法を練習した。第 5～6 回目の授業では、学生同士互いに計測練習を行った。一人の学生が健康増進教室の 2 回分に参加した。健康増進教室の毎回、前日に上級生との直前練習を行った後に当日に実施した。毎回の健康増進教室活動の終了直後、ルーブリックを用いて自己評価を行い、行事進行が許せば上級生と共に改善が必要な点などについて話し合った。そして、15 回目の最後の授業で、健康増進教室改善に向けて教員と交えて総合討論を行った。

・4 年生「社会との接続Ⅱ」

令和 3 年度後期より令和 4 年度前期まで継続して行った。令和 4 年度前期では、健康増進教室開催の前に作業の流れ、指導方法の確認をし、前日に 2 年生との直前練習を行った後に当日に実施した。健康増進教室活動の終了直後、栄養指導の報告およびルーブリックを用いて自己評価を行った。食事提供する回に限って担当を分担し、事前に、献立作成、栄養指導案および発表パンフレット作成。栄養教室の前日に食事準備、栄養指導練習。当日は食事作成。健康増進教室活動の終了直後、食事提供反省会およびルーブリックを用いて自己評価を行った。

・3年生「アクティブラーニングⅡ」

令和4年度後期より令和5年度前期まで、最初の授業でオリエンテーションを行い、健康増進教室開催のたびに、対象者の確認をして前項と同様に実施した。

（3）ルーブリック評価表（表2）

2年生の栄養マネジメント（身体計測・SAT）ルーブリックに関しては、改訂についての詳細な検討内容については、令和3年度FDSDワークショップで報告した。また、参考のために栄養マネジメント（指導）または、栄養マネジメント（食事提供）のルーブリックも示す。

表２　令和４年度　栄養マネジメントのルーブリック

A.　２年生用　栄養マネジメント（身体計測・ＳＡＴ）ルーブリック

	測定技術を身につける （測定技術力）	会話能力を身につける （会話・表現力）	チーム力を身につける （組織行動・創造力）
4 将来性	省みる 測定の結果が、適切な手順に従った結果か確認し、必要なら操作法を**改善**して、次回に生かすことができる。	省みる 会話・表現に支障がなかったか、対象者に理解されたか振り返って**検証**して改善し、次回に生かすことができる。	省みる 問題解決のために、新しい方向性や取り組み方の**改善策**をチームで話し合い、次回に生かすことができる。
3 能動性	適応できる 問題が起こっても、その場に**ふさわしい解決策**を考えて、効率よく測定ができる。	適応できる 問題が起こっても、その場に**ふさわしい適切な言葉**で、対象者に解決策を伝え誘導することができる。	適応できる 問題が起こっても、**問題の解決**のために取り組み、適切な改善をして行動することができる。
2	修得できる 習った手順に従い、**自分で**機器を使った測定ができる。	誘導できる 測定のために状況にあった適切な言葉で**自分の**意思を対象者に伝え、誘導することができる。	協力できる 決められた業務の流れや担当に従って、**協力して**スムーズな流れの活動ができる。
1	測定できる 取説を確認して、または手本となる者（教員または既学習者）の操作をまねて**機器を使った測定**ができる。	伝達できる 対象者に、はっきりと聞こえる大きな声であいさつができ、**誘導に必要な言葉**を伝えることができる。	理解できる 予め決められた**業務の流れ**のなかで、担当を分担することにより、自分のすることが理解できる。

B.参考　３、４年生用　栄養マネジメント（指導）　ルーブリック

	汎用的学習成果 （コミュニケーション能力）		専門的学習成果	
	対象者への会話能力	業務遂行能力	栄養マネジメント能力	総合的マネジメント能力
レベル４	④意思疎通のある会話ができる	④協力して業務を進めることができる	④対象者に応じた食生活の改善案を提案できる	④問題点を討論して解決できる
レベル３	③自分の意見を伝えることができる	③自らの役割を理解することができる	③対象者の食生活の改善すべき課題を見つけることができる	③報告書から問題点を見い出すことができる
レベル２	②相手の話を客観的に聞くことができる	②全体の流れを把握することができる	②対象者の測定値以外の必要な情報を把握することができる	②報告書の内容が論理的である
レベル１	①笑顔で対応できる	①事前準備ができている	①対象者の測定データが理解できる	①報告書が書ける

達成目標	現場に即応した管理栄養士の養成			
	対象者との意思疎通のある対話ができる	協力して業務をすすめることができる	対象者に応じた改善計画と栄養指導ができる	報告会で健康寿命延伸教室全体について問題点を討論して解決できる

C.参考　３、４年生用　栄養マネジメント（食事提供）ルーブリック

	汎用的学習成果（コミュニケーション能力）		専門的学習成果（総合的マネジメント）	
	対象者	チーム	対象者	チーム
レベル４	④話題が提供でき、和やかな雰囲気が作れる	④率先して協働ができ、全体をまとめることができる	④食事を活用した栄養教育・情報提供ができる。環境設定ができる	④反省会で問題点について討論し、改善策を見出すことができる
レベル３	③尋ねられた事にわかりやすく穏やかに会話ができる	③全体の状況を把握でき、自ら行動できる	③パンフレットの作成ができる	③食事提供までの品質管理ができる。総合的な判断力や応用力が発揮できる
レベル２	②声掛けができる	②自らの役割を果たすことができる	②対象者に見合う献立作成ができる	②献立指示書・作業工程表が理解できる
レベル１	①笑顔で迎えることができる	①自らの役割を理解できる	①対象者の特徴やニーズを理解できる	①　協力しテーマ決定ができる

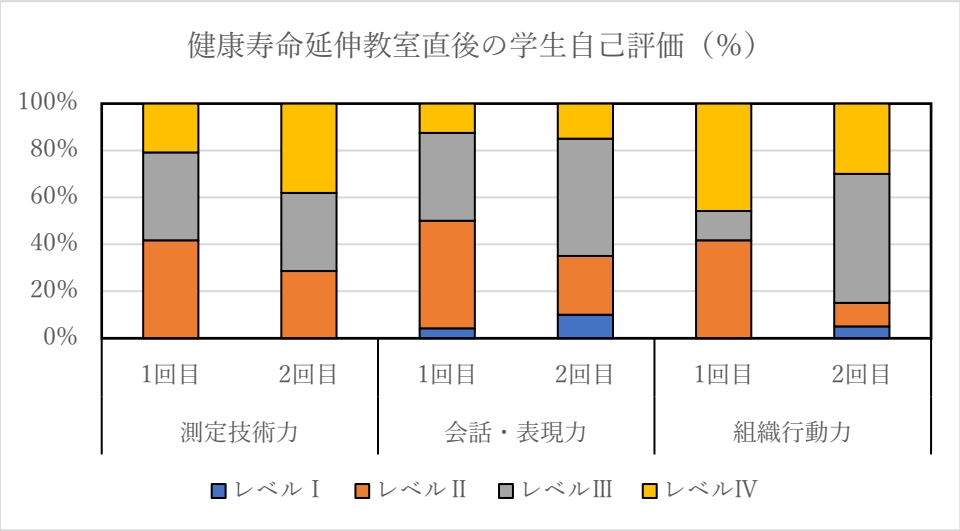
（４）２年生　ルーブリックによる学生自己評価結果（図１）

２年生について、ルーブリックよる学生の自己評価の結果を図１に示す。学生のルーブリック自己評価の到達度の推移をみるために学生の健康増進教室直後（A)、および最終授業時（B）の学生のルーブリックの自己評価を示す。

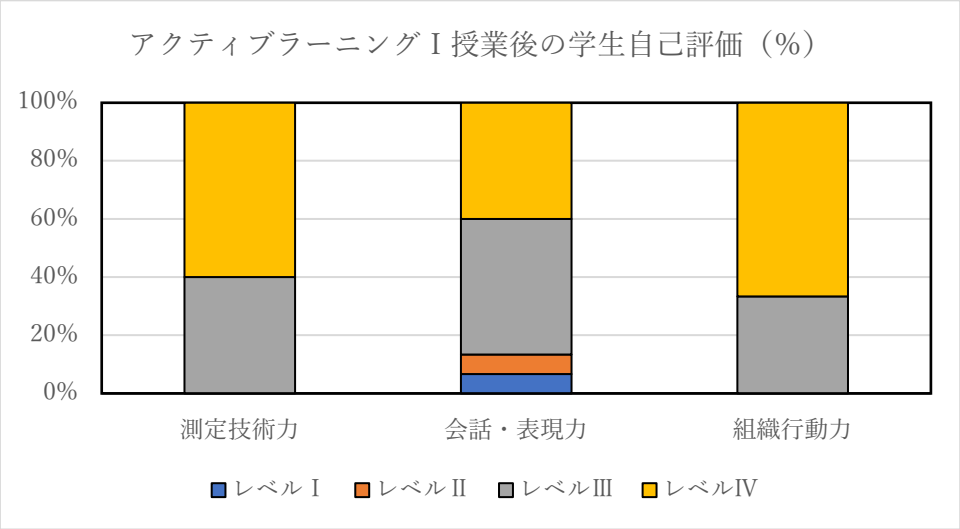
結果より、毎回の栄養教室直後（A）では、学生は習った通りの技術で、決めたられた業務は遂行できていると判断しているが、測定に何らかの問題が起こった時の対応、ふさわしい適切な言葉での対応に不安のある学生が 4 割前後いるという結果であった。一方、組織として、問題の解決・改善に向けて取り込むことができるという自信がついている学生が多いことが伺えた。また、授業最後（B）の結果では、学生を健康増進教室で扱った経験のある測定機器の班を選ばせての討論会を行ったので、学生には健康増進教室のさまざまな問題が見えてきて、具体的に改善に取り込む姿勢が見受けられた。すなわち、授業への参加に積極的になってきたと考えられた。

図１　栄養マネジメント（身体計測）担当学生のルーブリック自己評価（%）

(A) 健康増進教室直後



(B) 最終授業後



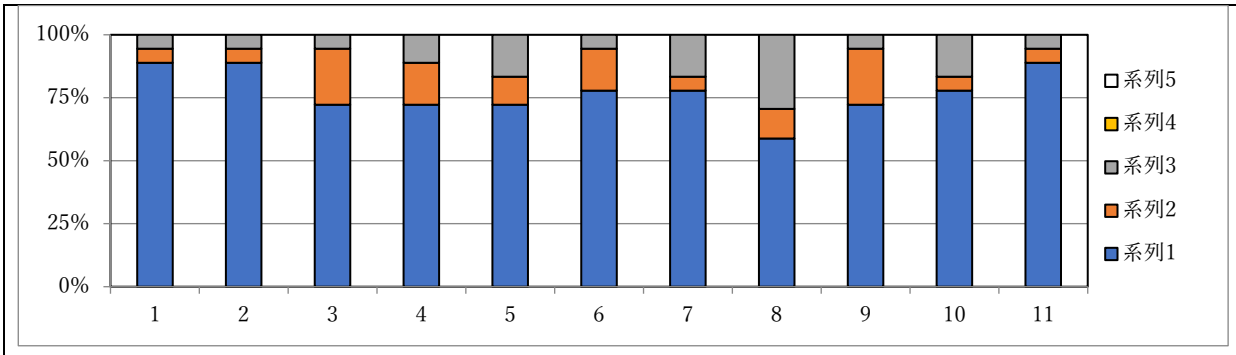
（５）２年生　授業アンケート（図２および図３）

令和４年度の最終授業が既に終わったので、学生アンケートを教員で集計して令和３年度と比較した。図２，３に示すとおり、令和４年度は令和３年度の授業アンケートと比較して全項目で「系列１：非常にそう思う」が高い割合であり、学生は授業に満足した結果であると考えられた。

図２　令和４年度　アクティブラーニングⅠ　授業アンケート

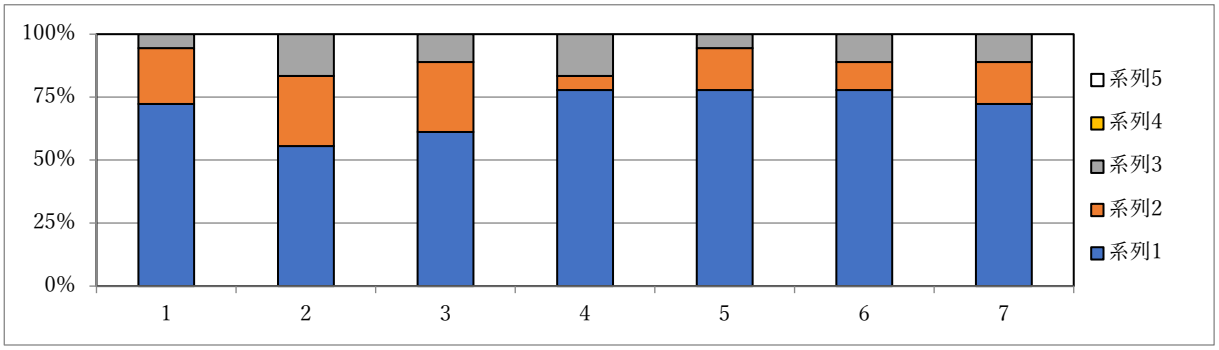
系列１　：非常にそう思う｜系列２　：ある程度そう思う｜系列３　：どちらともいえない
系列４　：あまりそう思わない｜系列５　：全くそう思わない

(A) 教員に関すること　授業アンケート項目



１）担当教員はシラバスを丁寧に説明した。
２）シラバスは分かりやすく作成されていた。
３）担当教員は熱心に授業を進めた。
４）担当教員の言葉は分かりやすかった。
５）授業の進め方（進度・ペース）が適切であった。
６）私語を注意するなど適切な授業環境を保った。
７）質問や相談に分かりやすく丁寧に応じた。
８）教科書は授業内容の理解に役立った。
９）専門的な内容でも担当教員は分かりやすく説明した。
１０）黒板の使い方や配布された資料は分かりやすく内容理解に役立った。
１１）担当教員はシラバスのとおり授業を進めた。

(B) 学生に関すること　授業アンケート項目

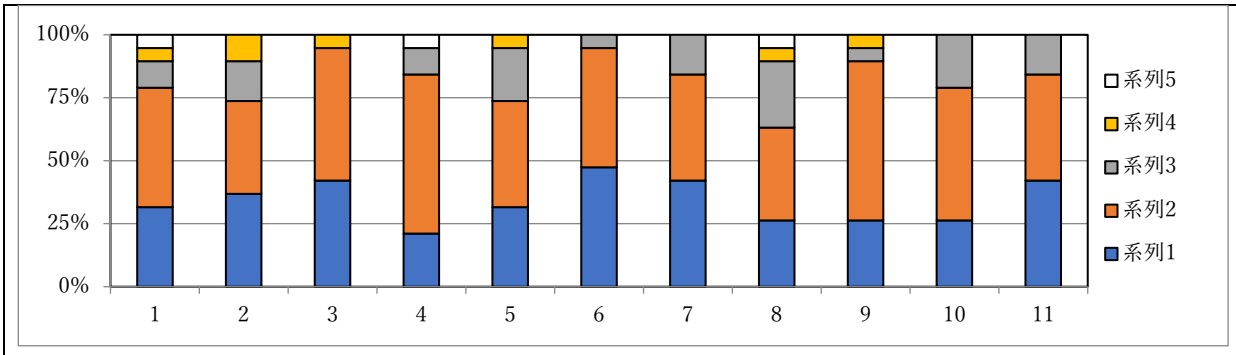


１）私はこの授業に積極的に参加した。
２）私は予習・復習などにまじめに取り組んで授業に出席した。
３）私はシラバスを読み、活用した。
４）私はこの授業に興味・関心を持つことができた。
５）私はこの授業で学んだ内容をよく理解できた。
６）この授業は役に立つと思う。
７）この授業を履修してよかったと思う。

図３　令和３年度　社会との接続Ⅰ　授業アンケート

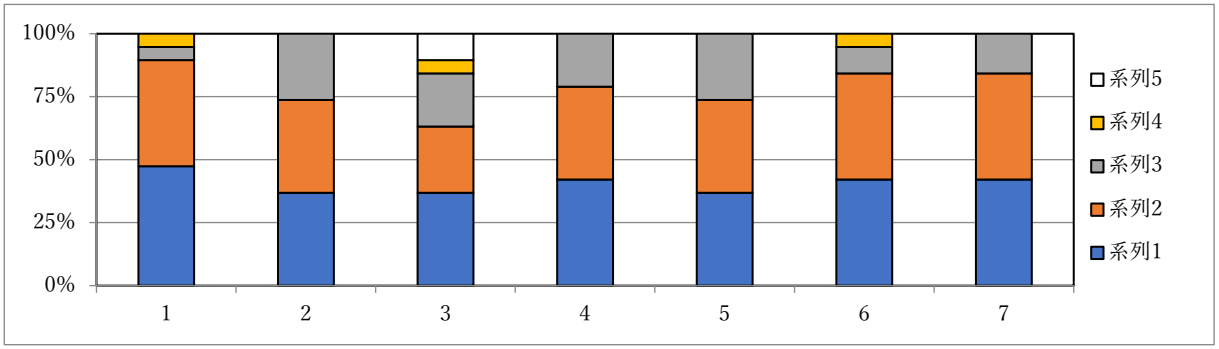
系列１　：非常にそう思う｜系列２　：ある程度そう思う｜系列３　：どちらともいえない
系列４　：あまりそう思わない｜系列５　：全くそう思わない

(A) 教員に関すること　授業アンケート項目



１）担当教員はシラバスを丁寧に説明した。
２）シラバスは分かりやすく作成されていた。
３）担当教員は熱心に授業を進めた。
４）担当教員の言葉は分かりやすかった。
５）授業の進め方（進度・ペース）が適切であった。
６）私語を注意するなど適切な授業環境を保った。
７）質問や相談に分かりやすく丁寧に応じた。
８）教科書は授業内容の理解に役立った。
９）専門的な内容でも担当教員は分かりやすく説明した。
１０）黒板の使い方や配布された資料は分かりやすく内容理解に役立った。
１１）担当教員はシラバスのとおり授業を進めた。

(B) 学生に関すること　授業アンケート項目



１）私はこの授業に積極的に参加した。
２）私は予習・復習などにまじめに取り組んで授業に出席した。
３）私はシラバスを読み、活用した。
４）私はこの授業に興味・関心を持つことができた。
５）私はこの授業で学んだ内容をよく理解できた。
６）この授業は役に立つと思う。
７）この授業を履修してよかったと思う。

（７）健康増進教室参加者のアンケートの意見記述欄の内容（表 3）

健康増進教室では、対象者のライフステージが広がってきたので、部外者である対象者の意見をくみ上げることが、健康増進教室の改善につながると考えられる。しかし、今年度は健康増進教室用の調査表が準備できてなかったので、今年度は以前の栄養教授教室で使用したアンケートを急遽流用し、部外の対象者（第 51 回高齢者および第 20 回地域短大生）に対してアンケートの取れた回の中の、意見記述の欄についついて表 3 にその内容をまとめた。

第 51 回の高齢者に対するアンケートについては、体成分測定について意見があった。体成分分析装

置の測定については、毎回のことであるが何人かは、スムーズに測定できない場合があり、その原因として適切な姿勢への誘導が困難である場合があるが、原因が不明な場合も出てくる。対象者が測定台に上がる前に未然に防ぐ処置を行うことを検討している。しかし、出来るだけデータを揃えたいので、対象者には 3 回を限度に測定を繰り返してトライさせていただくようお願いしている。それでも測定できない場合は、両手で測定する簡易の体脂肪計で測定している。

第 20 回地域の短大生に対するアンケートでは、対象を広げて実施することに興味を持ってくれたようだ。

2 年生、3、4 年生についてもアンケート記述欄の意見も掲載したが、これらについては、各回の健康増進教室実施直後の反省会で話し合っており、その都度問題点については改善が検討されている。アンケートにはなかったが、栄養指導担当の 3 年生から、「媒体内容が若い者には向いていない部分もあるのでは？」という意見が上げられていて、これは重要な問題点であると考えられる。

表 3　参加者へのアンケートの意見記述欄の内容

A.　第 51 回アンケート（R4.5.28）

（対象：高齢者）	・学生さんがとても親切で話しやすく、感じが良くて、たいへんお世話になりました。 ・よい環境（緑がいっぱい）で、ゆったりできました。学生さんはやさしくてよかったです。 ・体成分分析器の操作がいま一歩だった。他は順調であった。 ・よい環境（緑がいっぱい）で、ゆったりできました。学生さんはやさしくてよかったです。
＜測定＞（２年生）	・ない
＜栄養指導＞（４年生）	・主にタブレットのことしか説明できていなかったのでもっと勉強しとかないといけないと感じた。 ・C108 での順番待ちの列（特に骨密度と脈波が交差していた） ・簡潔に話すことと、もう少し話すペースを遅くすれば良かったと思う。 ・カゴ（荷物を入れる）がほしいと言われた。 ・測定待ち時の対象者との会話を積極的にすべきだと感じた。 ・高齢者の方の誘導、案内があまりできていなかった。 ・時間がのこってた時に高齢者がたいくつしてたので話をしに行ったのは良かったと思います。 ・案内をもっとスムーズにできるようにならないといけないと感じた。

B.　第 20 回地域　アンケート　（R4.11.26）

（対象：短大生）	・幼教、食養の先生もやってみたらおもしろいと思います。 ・特にないです。丁寧に検査して下さり、ありがとうございました。
＜測定＞（２年生）	・個人的には、もう少し積極的に動いたらよかったなと思います。
＜栄養指導＞（３年生）	・もっと積極的に話しかけるべきだった。 ・先生同士でもっと事前に話し合っておいてほしかった。（測定を開始する時間など） ・先生も栄養指導を見せてほしかったです。みんなで楽しく出来ました。

（６）2 年生　健康増進教室の改善案（表 4）

表 4 に各健康増進教室の反省会や総合討論会で学生から提案された、健康増進教室実施についての改善点を示す。業務の流れについての改善案についても、測定時の改善案についても毎年同じような内容項目がリストとして挙がっていたが、今年度の内容は例年に比べて具体的（事前チェックの方法とか準備すべき用紙などの備品、対象者の誘導方法、4 年生との連携内容。機器操作の特徴についての注意点、機器測定時の誘導方法、コミュニケーション力の向上ための話す内容など。）であり、この内容および前年度までの問題点を参考に令和 5 年度の健康増進教室実施マニュアルを改訂し、令和 5 年度の授業で改善を目指すことにより、健康増進教室の質の向上に生かす。

表 4　栄養マネジメント（身体測定等）令和５年度への改善点のまとめ

１）業務の流れの改善
（前日）
プリンタのインク残量や用紙の確認をする。
プリントアウト用の用紙を当日 2 回分用意しておく。
対象者の名前などの情報を、別スタッフと二重チェックしておく。
対象者の情報交換の方法について 4 年生と確認をしておく。
お互いに対象者となり、いろいろな場面を想定し、声掛けや測定方法を確認する。
（当日）
同室で測定している他機器の担当者と連携をとり、測定順を誘導する。
当日、結果について簡単に述べ、栄養指導は、4 年生に尋ねるよう誘導する。。
当日、測定最後の栄養指導終了後に機器片づけを行う。場合により、栄養指導を静かな別室で行うよう提案してみる。

２）測定時の改善
２－０）機器全般
コミュ力をつける。測定を待ってもらっている間、高齢者と話が進む会話リストを作っておく。
測定中は、対象者に話をしないよう伝える。
測定の原理などを調べておいて質問があったら答えられるように例文を作り覚えておく。
測定結果の値の意味を理解しておく。
結果の説明をする内容を、予め統一して言うために、スタッフが練習をしておく。
２―１）SAT 食事調査
プリンタによる印刷が遅いことを忘れない。
置き換え食品のリストを 4 年生と協力して作っておく。食品サンプルを増やす。
説明するときに告げる内容のマニュアル化、「これは、〇〇さんの結果です。星が△個あるので、星が 5 個に近づくように 4 年生に話を聞いてみてください。」を進める。
２－２）体成分分析
体内に微弱電流が流れるので、金属が体内に組み込まれている場合、正しく測定されない可能性があることを説明する。
待ってもらっている間に、やってもらうべき動作（動作の流れ）を簡単に説明する。（内容：ウェットティッシュで予め手を拭いてもらう。靴下、ズボンの裾が電極に触らないようにする。ハンドル（電極）の持ち方。金属部分（電極）に足首をつける、など）。
簡易の体脂肪計では 80 歳以上は、測定機器の都合上 80 歳で測定する。
２－３）骨密度測定
利き足の逆足で測定するのか、一定側の足で測定するのか決めておく。
80 歳以上は、測定機器の都合上 79 歳と登録しておく。
２－４）加速度脈波計
センサーの消毒をした後に、センサーを乾燥させる方法の検討が必要。
２－５）ヘモグロビン測定

測定前に指の血管を過度に刺激しないようにして、手を温めてもらう。
測定中に対象者にも計測画面を見てもらって、指の位置を測定できるように誘導する。
２－６）血圧測定
上着を脱いでもらったりして、測定する方の腕の衣服を薄くする。
身長により、椅子の高さを調節する。（上または下にする）
測定前に深呼吸をしてもらう。

（８）　今後の健康寿命延伸教室の課題と今後の方針

2 年生　ルーブリック評価表使用について、学生に直感的にイメージしやすい用語を用いた評価表を授業中に表示した。その都度、学生はこれに基づいて自分の行動を自己評価することにより、授業への能動的な参加を促すことができたと考えている。令和 5 年度には、今までは、1 個のルーブリックを繰り返し用いていたが、業務遂行の熟達度を経時的に評価するために、ルーブリックを分けるべきか検討したい。また、学習成果として目指している対人コミュニケーション能力、チーム管理能力、データ収集力（測定技術力）とともに、収集データの管理力と共に理論的思考力の獲得を目指したルーブリック評価についても見直し検討したい。

健康寿命延伸教室マニュアル改訂について、2 年生から改善案が具体的に示されたことにより、2 年生を対象とした測定部分の改訂が必要である。またこれに加えて、栄養ケアマネジメントの対象者を高齢者からあらゆるライフステージの者にも拡大していくことに従い、３，４年生では健康増進教室のたびに栄養指導方針が変化するので、それに対応したした媒体の改訂が必要になるだろうと思われる。今後は、大規模なマニュアル改訂になるだろうが、担当教員が協力して取りくむべき問題である。

対象者に関しては、今後とも倉敷地区老人連合会の会員様との交渉も含め、学内教職員や近傍の外部施設を対象とした可能性についても、時期を調整しながら健康増進教室を継続していくことは必要であると考えられる。これらの外部対象者の意見を調査により取り入れて、尊重しながら健康増進教室の質の向上を目指し、地域住民の健康づくりに関与できる管理栄養士の育成に寄与したい。

2　健康寿命延伸教室の学生支援について

2-1　健康寿命延伸教室の目的を達成するための教育資源を有効に活用している。

健康寿命延伸教室の目的を達成するための教育資源を有効に活用している。診断・説明機器（タブレット端末、体成分分析器、自動身長計付き体重計、加速度脈波測定システム、食育 SAT システム）の使用方法の習得し技術の向上を図っている。教育資源を有効に活用していることについて、FD・SD ワークショップで報告し情報共有を図っている。（上記参照）

3　産業界等社会からの視点を含めた、プログラム内容・手法について

3-1　ステークホルダーに対して外部評価を行っている。

外部評価の実施について、下記のとおりステークホルダーに対して外部評価を行っている。また、外部評価の結果を FD・SD ワークショップで報告し全学的に情報共有を図っている。

高校教員に Society5.0 の取組について確認してきたところ、良いと感じている教員が少ないことがわかった。プログラムに関係するため説明資料を早急に作成し広報活動などで活用する。

外部評価（地域・高大接続連携校）について

岡山学院大学の教育方針は、「現場に即応する管理栄養士の養成」と「地域の栄養教育を推進する

大学」として、地域創生の先導を担っている。
本学は、この方針を基に具体的な取り組みを実施し、学生の学習成果の獲得を図っている。しかし、平成30年度までは、この取り組みに対する地域の評価者の意見を調査したことは無かった。
そこで、地域の評価者による「外部評価」の実施が、今後の本学の教育活動を実施するうえで、大変有意義であると考えた。令和元年度の試みとして、日頃から高大連携で交流の深い高等学校６校を評価者とすることが適当であると考え、アンケート調査を実施した。また、令和４年度は、令和２年度と令和３年度入学者が多い高等学校を２校に、近隣高校であり、栄養学進学者が多い２校を追加した。アンケートの依頼にいては、郵送を取りやめ、高校訪問を実施しアンケート内容の説明をさせて頂き、その場で貴重なご意見を伺うことができた。
コロナ禍において、高大接続連携校としての企画・活動が出来ず、今回高等学校を訪問してアンケートの依頼をすることで、高校の先生からご指導を頂いた。令和５年度に向けて令和５年４月の時期に高大接続連携校６校と栄養系進学者がある高校の各担当者（進路指導部教員など）へ訪問する予定である。

（１）アンケート実施校
・高大連携の高等学校　６校（令和３年度実施３校）
・指定校の高等学校　　４校（令和３年度実施２校）
　※令和３年度実施オープンキャンパス参加者の多い高等学校（９校）

１）アンケートの実施方法
令和３年度はコロナ禍で郵送としたため、より分かりやすく解説した資料を作成した。令和４年度は、アンケートを実施する中で、事前に電話にてアンケートの目的や意図の説明を行う為訪問をさせて頂き、貴重なお時間から詳しく対面で行えた。対象者は高等学校の進路指導部担当の教員とした。対象の高等学校に送付するアンケートや資料の内容は、大学と短大が協力して作成した内容を参考にした。

２）資料作成
資料のコンセプトは本学独自の「本学の学生支援体制」について、および令和４年度パンフレットより、「入学前」「在学中」「卒業後」「地域貢献」「カリキュラム」「学習支援」「施設環境」などに分けて資料を作成した。
３）アンケートの様式
様式は、評価者がなるべく回答しやすいようにA4用紙１枚にまとめ、５段階評価と自由記述とした。令和２年度よりアンケート項目に新たにSociety5.0の項目を追加したので、調査項目は８項目とした。

４）アンケート依頼時期に関して配慮したこと
うに、高等学校の行事等が比較的少ない１２月に設定した。また電話での依頼の際には、オープンキャンパスの参加のお礼を言うとともに、在校生の現在の状況などについてわかる範囲で報告したとこ

ろ、対象の高等学校の担当者に好評であった。

（２）アンケートの集計結果

高校の進路担当の教員のコメントは【資料】に掲載した。

岡山学院大学の取り組みに関するアンケート集計結果　：（令和元年～４年度）

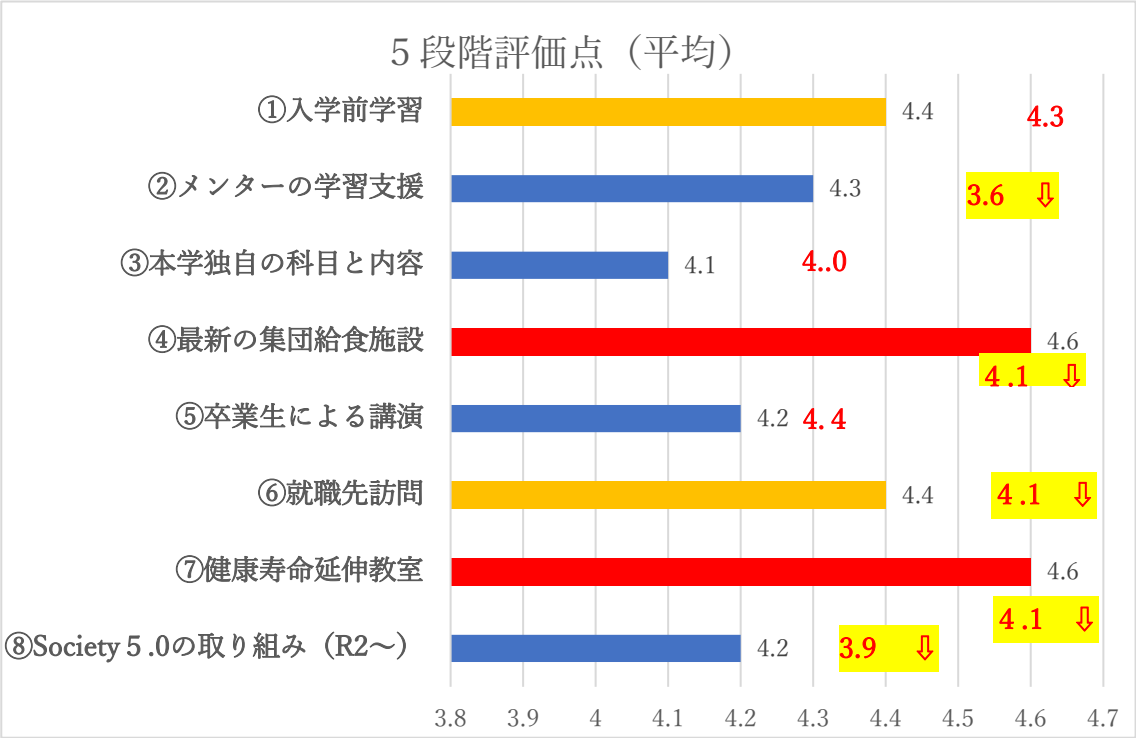
とても良い

評　価　項　目(5 段階評価)		年度	1	2	3	4	5	平均
①	入学前の取り組み方：「入学前学習」について	R1-R2				1	4	4.8
		R3			1	5	3	4.2
		R4			1	3	3	**4.3**
②	在学中の取り組み方：「クラスメンターの学生支援に関する具体例」について	R1-R2			1	2	2	4.2
		R3			2	4	3	4.1
		R4	1		2	2	2	**3.8**
③	在学中の取り組み方：「本学独自の科目と内容」について	R1-R2				3	2	4.4
		R3			2	6	1	3.9
		R4			3	1	3	**4**
④	在学中の取り組み方：「本学独自の教育施設」（給食経営管理実習室）について	R1-R2					5	5
		R3				6	3	4.3
		R4			2	2	3	**4.1**
⑤	教養演習等での外部講師（卒業生）による講演」について	R1-R2				1	4	4.8
		R3			3	4	2	3.8
		R4				4	3	**4.4**
⑥	「就職先訪問による就職先からの評価」について	R1-R2				1	4	4.8
		R3			1	6	2	4.1
		R4			1	4	2	**4.1**
⑦	「健康寿命延伸教室」について	R1-R2					5	5
		R3			2	2	5	4.3
		R4			2	2	3	**4.1**
⑧	「Society5.0 の取り組み」について	R1-R2				1	1	4.5
		R3			2	4	3	4.1
		R4		1	2	1	3	**3.9**

R1-R2　　（５校）

R3　　（９校）

R4　　（７校）



棒グラフは、令和３年度、赤い数字は令和４年度の結果より

（３）アンケートの集計からの考察

アンケートを実施した７校の高等学校から、本学の学生支援体制（８項目）に対して、５段階評価で、平均 3.58(令和３年度平均 4.4)の評価が得られた。

質問１の「入学前学習」について、前回の改善点として、新しくスポーツ栄養からの化学と生物を取り入れ、２回講義と調理実技を開催する。

そして、調理技術からも前回１回から２回に増やしたことで、「入学後へのスムーズな切り替え（意識のスイッチ）が、できると思うのでありがたい」、「良い取り組みだと思いますが、化学の課題を出すべきかと思います」との意見があり、参加の選択肢と高校生が敬遠にするの生物・化学への取り組み評価を頂いた。

質問２は低評価であり、質問２―①のメンターの学生支援に関する具体例である。具体例には、本学パンフレットにも掲載しているマネジメント計画による、クラスメンターと共に、PDCA サイクルを回し、着実にステップアップするなど、各学年での面接をしながら GOAL に向かい目標達成のサポートしている。更にパンフレットでも学習支援でクラスメンターが、一人ひとりの学生に生活・学習から就職支援まで、万全の相談・指導体制を掲載しているが、パンフレットからでは、伝えきれなかった。意見として、「メンター支援制度についての評価するのでしょうか」、「高校でもどちらかというと、生徒一人ひとりに手厚い指導をしています。」このメンターの支援制度については、高校から引き続いて、大学でも学生一人ひとりに手厚く指導していることをお互いに情報交換することが、高校側としても安心するのではと考えている。本学の大学生活を高校卒業生の声を高校側に伝えることが一番であると考える。メンター制度の評価が高い点は、「学生自身がどうすれば良いか、判断が出来

ない時にはこの制度はありがたい」という意見から、引き続いて学習支援・相談体制の強化を行いたい。

質問２－②の大学独自の科目と内容については、「貴学の要所要所でSocity5.0 を見ますので、ICTを活用出来る人材育成をお願い致します」の意見から、１年生から、マネジメント力基礎科目群として、ICT リテラシー、ソサエティ 5.0 理解、データサイエンス、アクティブランニングと４年生まで講義していることが評価するが、可視化して欲しい意見がある。具体的な取り組み方が見えてこないことから低評価に繋がった。

質問２－③の大学独自の教育施設は、学校給食の大量調理施設や調理技術など衛生面などからの評価が口頭でもお伺いしました。この施設から、「高大接続連携で活用できるならありがたい」との意見もありました。

質問3-①外部講師（卒業生）による講義について、「高校でも同じですが、外部からの話し方が同じ内容でも心に残っています」問う言う意見で、学生の為にも、社会人として働く卒業生の声を聴くことで、学業をはじめ、社会人へのあこがれと目標に繋がると考えられる。

質問３－②就職先訪問による就職先からの評価の取り組みは、「このような取り組みができることは素晴らしい」とご意見を頂き、卒業後でも連携、相談していることだと考えられる。

質問４の地域貢献での健康寿命延伸教室の取り組みは、昨年度同様に高い評価である。
「継続して実施にすばらしい」意見もあり、学生時代に、栄養指導を通じて、専門的な会話や高齢者に伝える貴重な体験はコロナ禍でも続けて欲しいとの言葉を頂きました。

質問５は、令和２年度より加えられたSociety5.0 の取り組み方で、特に低評価である。
「高校でもタブレットを支給し、高校の先生も活用できる時代である。ICT 活用ができる人材が、より重宝される世の中だと思う」と高評価もある。しかし、本学の１年生からの学習前講座に参加したアンケート調査による開催しても「どちらでもない」という意見多数と、高校の先生からの「生徒にとって実感しにくいところがある」ことから、評価しにくい部分もあることが判った。

（４）外部評価の実施の今後の展開の検討

令和３年度のFD 報告書には高大連携や指定校の高等学校に対して、今までこのような「アンケート」の実施をしておらず、一方通行になっている懸念もあった。しかし令和元年度から３年間、各高等学校の進路担当の教員に、大学の教育方針や実際に実施している事柄について説明することにより、自分たちが実施してきたことが正しかったことを再確認できたように思われた。と記述してる。しかし、COVID-19 禍が令和２年より現在も続いており、この間、高大連携高校や指定高校の密になる連絡が希薄になったと受け止めている。なぜなら今回高大連携高校６校のうち４校が来年４月に高校訪問を頂ければ、互いの利点を生かし、企画ができればと言って頂きました。また指定高校は、「４月に、一度高校の授業を見に来てください」と申し出があり、お互いの情報交換から良き連携ができるのではないかと信じている。

今回、アンケート協力での高校訪問から、今後もこのようなアピール活動が必要であると感じた。本学から質問アンケートの取り方については、文書を送付するだけでなく、教員が高等学校に出向いて説明することにより、高校の教員がアンケートに答えやすくなり、かつコミュニケーションをとる良い機会になると思われるのでコロナ禍が落ち着いてきたら高等学校を訪問して実施したい。

今後の課題として、来年度は今までアンケート調査を実施していない高等学校にも実施していきたい。

　また5段階評価のうち、5や4が多いなか、3の評価をいただいた項目に注目し、厳しいご意見を頂くことから、よりご理解いただけるような改善策を講じる必要があると考えられる。またアンケート項目や資料の内容を見直して、より分かりやすいものを作成する必要があると考えられる。

今後も継続して外部評価を受けることで、大学の教育活動の充実を図ることができると考えられる。